

# ノルデステ（東北ブラジル）工業化 の問題点

幸 田 清 喜

昭和41年12月12日、東京教育大学のブラジル調査団一行がレシーフェをセルトン（奥地）に向けて出発した第1日、ゴイアナの町の食堂で昼食をとった。群がるハエを追払い、サービス好きらしい主人のあやつるカニの曲芸に興じながら、盛りだくさんの料理で熱帯の空腹をみたした。食後、主人の「工場を建てにきてくれた調査団らしい。どんな工場でもよいから雇用の機会を与えてほしい。給料は高いほどよい」といった願望をこめた言葉に一同顔を見合わせた。調査行の初日に、早くも現地から問題が出された形である。ノルデステは工業を欲している（調査順路は図2参照）。

## 1. ノルデステ文化圏

**三地帯の特性** ブラジルでノルデステ (Nordeste) とよばれる地域は、必ずしも確定した領域ではない。それは単に位置的にブラジル東北部というよりは、そこに展開する特異な自然・社会的構造の文化圏をさすことが多いからである。後述のステーネ（東北開発庁）の管轄区域（表1）は、ノルデステを最も広くとっていて、マラニョン、ピアウイ、セアラ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、パライーバ、ペルナンブコ、アラゴアス、セルジッペ、バイアの各州とミナス・ジェライス州北辺を含んでいる。いわゆる早魃多角形地域（図1）をすべて包括していて、その面積は約160万 km<sup>2</sup>、人口約2600万で全国のそれぞれほぼ2割と3割をしめている。これを一国とみなせば優にラテン・アメリカでの大国である。

ブラジル経済は統合された組織ではなく、地域経済の非補完的な連合に

表1 スデーネ管区の面積・人口

州 名 (略号)	面積 (km <sup>2</sup> )	人 口 (1000人)		
		1950	1960	1966(推定)
Maranhão (MA)	328,663	1,583	2,492	3,270
Piauí (PI)	250,934	1,046	1,263	1,413
Ceará (CE)	148,016	2,695	3,338	3,794
R. G. do Norte (RN)	53,015	968	1,157	1,286
Paraíba (PB)	56,372	1,713	2,018	2,223
Pernambuco (PE)	98,281	3,395	4,137	4,655
Alagoas (AL)	27,731	1,093	1,271	1,392
Sergipe (SE)	21,994	644	760	838
Bahia (BA)	561,026	4,835	5,991	6,806
Minas Gerais (MG) の一部	57,328	—	517	600
Fernando de Noronha	18	1	1	1
計	1606,092	17,937	22,946	26,278

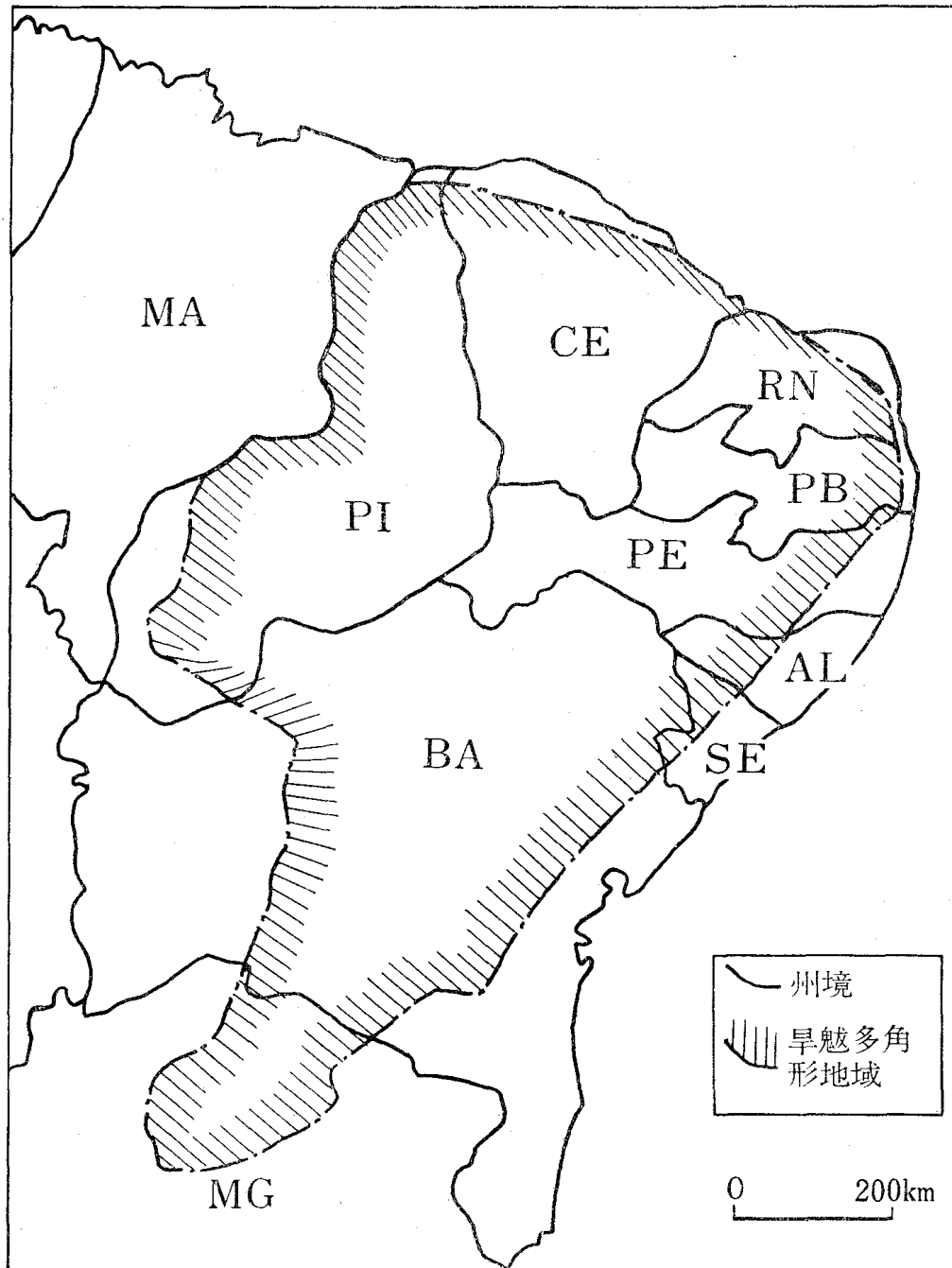
Sudene: A Grande Oportunidade: Industrialização 1966による。

( ) 内は州名の略号。

すぎないと言われ、この龐大な空間と人口をもつノルデステは、アマゾン  
アとサンパウロ中心の中南部とてい立する孤立地域として規定される。ノ  
ルデステは一言に飢餓地域である。1人当所得は年180ドル以下で、摂取  
カロリーは1日500カロリーにすぎず、生存のための最低条件さえも維持  
しえないことがしばしばおこる、西半球中で最もおくれた地域である。

しかもブラジルの開発史はノルデステの開発にはじまる。砂糖産業の展  
開であって、ノルデステの社会・経済は砂糖生産によって特徴づけられ、  
それらの動向は、砂糖経済の消長過程において捉えられるとみなされてき  
た。ここが、海岸から内陸に向うにつれて雨量が減じ、セルトン (Sertão)  
に早魃常襲地帯が定着するほどの苛酷な環境を契機として、人間の生活は  
地域によって差異を示しながらも、それぞれが何らかの形で砂糖経済の影  
響圏の中におかれてきているからである。

図 1 旱魃多角形地域



州名は表 1 参照

海岸地帯は、第三紀以後の海岸低地と低い台地からなり、平均約100kmの幅でリオ・グランデ・ド・ノルテからバイアまで続いている。雨量は、ほぼレシーフェ付近を境として北部は冬雨、南部は夏・冬雨があって、年

平均1000mm～2000mmぐらいに達し、気温は年平均24°～26°ぐらいである。土地は一般に肥沃であり、とくに片麻岩や花崗岩などの風化した腐植の多いマサッペ（Massapé）がこの地帯の北部やバイア湾付近などに分布していて、南部の玄武岩などの風化したテラ・ロッサ（Terra Roxa）と並ぶ沃土である。南米大陸が大西洋へ突き出ているヨーロッパに最も近いこの地域へポルトガル人がいち早く上陸した16世紀初頭以来、サトウキビの栽培に好適なこの海岸の森林（mata, マタ）地帯は、大土地私有制（Latifundio, ラチフンジオ）によって砂糖の単一生産地域として開発されていった。労働力としては、原住民のインディオだけでは足りず、西アフリカから黒人奴隷を大量に入れた。エンゼーニョ（Engenho）とよばれた砂糖工場はサトウキビの大農場での自給制が特徴で、農場主の邸宅を中心に、礼拝堂、奴隷長屋、各種の仕事場が配置され、燃料用林地や役牛などにいたるまで、あらゆる必要物が揃っていた。生活必需品も農園内の売店で一切が求められるので、エンゼーニョが集落の単位であって、エンゼーニョのない単なる集落の発達はあまり考えられなかった。こうして、マタ地帯は、砂糖と奴隷とカシャーサ（ピンガ酒）を一体として植民政策に結びついて繁栄し、16世紀中葉から17世紀にかけて世界の砂糖市場に君臨した。奴隷を輸入し砂糖を輸出する港市レシーフェとサルバドルがその拠点で、後者は当時ブラジルの首府であった。

奴隷は1888年に解放された。しかしサンパウロ州のコーヒー園におけるように、奴隷が独立農になり、また外国移民もはいつて近代化していったのとは異なり、ここでは奴隷開放は資本家と賃労働者の分化という生産関係の変革の形で行なわれ、奴隷には土地が与えられなかった。したがって奴隷は社会的には解放されたが、経済的には劣悪な賃金制で依然つなぎとめられ、かくて無産労働階層がおびただしく生み出されることになった。

このころからイギリスの産業資本が進出し、ウジーナ（Uguina）とよばれる法人組織の近代的砂糖工場が建設されるようになって、サトウキビの

耕地化が強行され、マタはいっそう伐り開かれて原生的な森林は殆んどみられなくなり、一方食料生産地域が限定されてきて食料不足が大きくなってきた。またウジーナの成立に平行して鉄道の敷設が進み、両者の相互規定で糖業プランテーションの資本主義化が押し進められた。エンゼーニョの糖業マニユは買収されるか、奥地向けのラパドゥーラ（板砂糖）生産に転換したりしている。

しかしマタ地帯における農園の大土地私有制は300年の因習を殆んど持続している。労力は、劣悪な住居（奴隷長屋時代のも残存）と狭少な雑作地を貸与され、低賃金で働く常雇や、給料の代りに収穫物の何割かを農園主から受け、あるいは収穫物の何割かを借地料の代りに農園主に渡す、いわゆる分益小作などの従属農により、なお不足の場合は臨時雇入れの労働者によっている。サトウキビの栽培は労働集約的で土地生産性はきわめて低い。サンパウロ州にくらべ、サトウキビ1t当り1日の雇用量は3倍、1ヘクタール当り収量は2/3といわれている。しかも農園主は生産性を高める意欲がなく、豊富低廉な労働の犠牲と人為的な価格保証政策によりかかっているだけである。こうして国内市場は南部の糖業地に奪われ、海外市場はせまくかつ不安定であって、ノルデステの糖業は構造的危機に立っている。

アグレステ（Agreste）地帯は、海岸のマタ地帯と奥地のカーチンガ（Caatinga）地帯との漸移地帯である。ブラジル高原がその周辺部で500～600mの高度に波状に高まって南北にのびているボルボレーマ高原の部分である。雨量は1000～650mmぐらいで、カーチンガよりも丈の高い灌木林帯である。土壌は小石まじりで腐植が少なく、一般にそう肥沃ではないが、独立小農の多い農業地帯で、小さく区切られた耕地にマンジョーカのほか1年生ワタ・アガーベ（シザル麻）・パイナップル・タバコなどの商品作物が栽培されている。経営は因習的で、畝切りの方向は急雨によるはげしい土壌流亡を考慮しているとは思えず、まして機械化は殆んど行な

われていない。

ボルボレーマ高原を西にこえるあたりからセルトンのカーチンガ地帯になる。先カンブリア代の褶曲をうけた結晶質岩石が広く露出した高度 200 m内外の準平原面が、起伏のゆるやかな波状平原状を呈しているところである。周辺のボルボレーマ高原で海洋の影響を遮られて雨量は少なく、ほぼ 900~400mm が年平均である。降雨は地域により、また年により、ひどく気まぐれで偏差が大きく、旱魃 (Sêca. セッカ) と洪水が隣り合っている。大旱魃はほぼ 10 年に 1 度の隔りで襲ってくるという。サボテンやアナナスを交えた落葉性のマメ科などの多い有刺植物の灌木でおおわれた、いわゆるカーチンガ (土語で白い森という意味) がこの乾燥地域を特徴づけている。

カーチンガ地帯でも、マンジョーカ、フェジヨン (豆)、トーモロコシなどの自給作物のほか、多年性の木ワタ (長繊維) やアガーベなどが換金用に栽培されている。しかしカーチンガ地帯の主業は牧畜である。16 世紀に海岸の森林地帯に砂糖のプランテーションがおこり、18 世紀に南部にゴールド・ラッシュがあって、人口が増加し、役肉牛の需要が拡大するにつれ、セルトンは、ポルトガルの植民者によって牧牛地帯として形成されていった。牧牛も大土地私有制と結びついている。荒涼たる乾燥地帯が牧牛地帯として成立したことは、自然の貧困を広さで補った形であり、豪州の奥地開発と似ている。豪州とちがった点は、ここには原住民インディオとポルトガル人の混血したカボクロ (Caboclo) の労働力があることである。牧畜は糖業とちがって大量の労力を必要としない。それで黒人奴隷はセルトンにはいない。ファゼンダ (Fazenda) の直接経営もみられるが、これをユーホルビアか木柵で区切って、それぞれをカボクロのパケイロ (牧夫) にまかせ、鞭でなく温情で手なづけておけばおもに都市に住む牧場主は安泰である。カボクロは牧場の世話をする代りに猫額大の借地に、住家を建てるのが許され、雑作して自給生活に甘んじている。パケ

イロはこの外に4～5頭の仔牛が増すごとにその1頭を貰う契約であるが、カーチンガでは草も少なく、パルマ（とげなしうちわサボテン）やマングカルー（柱サボテン—とげを焼き茎を飼料にする）を栽培して旱魃時の飼料とする程度のこととて、成牛はやせ仔牛はふえない。いまはむしろ牛をもらうよりは低い月給制が多くなっているという。バイア州には牧草をまく改良牧野が次第に増しているが、カーチンガの大部分は自然牧野で旱魃につよいヤギとロバが多い、ノルデステのブラジルでの頭数比は、牛は10%程度であるが、ヤギとロバはともに60%ぐらいである。

**所得の階層的アンバランス** ノルデステにおける大土地私有制の因習は、一握りの旦那衆の退嬰的な豪華な生活と、おびただしい無産階層の乞食同様の生活を生み出している。低賃金ながらも（表2）農場の常雇や小作などでできればまだましな方で、農場や牧場にも雇用されない貧困者が、セルトンにはことに夥ただしい。都市の路傍で、放心したような男女のいかに多いことか。セルトンがブラジルの出稼労働の給源として大きく位置づけられるゆえんである。セルトンでは毎年十数万の出稼があるが、10年に1度といった大旱魃にはそれが急増する。1・2月にはいっても雨がなく、3月になっても降らず、セッカが必定となると、数十万のセルタネジョ（奥地人）は出稼の体制にはいり、パウ・デ・アラーラ（おうむのとまり木）というトラックにテントを張ったバスに鈴なりになり、フォルクスワーゲンに10人以上もすしずめになって、南部の大都市や農業地帯、あるいは海岸地帯の都市に殺倒する。首都ブラジリアの建設も出稼労働へ大きい市場を提供している。その一部は都市のスラムにたまって常住するが、セルトンに雨がいったという情報がはいると、大多数は故郷忘じ難くここへ帰ってくる。そして、もとのほだか・ほだしの生活にもどる。人口は減ずるところか、低開発地域に通有な多産多死型である上に、砂糖経済の補完的役割を担う地域として、その稠密地域からはみ出した人口の避難場ともなり、人口はおりのようにたまる一方である。

表 2 ブラジル各地の賃金調査

調 査 地 点	労 働 種 別	男子 1 日 の 賃 金 (Cr\$)	備 考
Campina Grande 付近	借地農のファゼンダ内農作業	500	女子は300Cr\$ 食事付
"	煉瓦積み	2,000	
Areia 付近	請負農業労働	1,500	
"	砂糖工場日雇	1,200~3,000	
Crato	紙工場	1,700	最低賃金 (1日8時間労働)
Palmares	砂糖工場	1,700	" ( " 5時間 " )
Maceio 付近	借地農のファゼンダ内農作業	1,000	6時間労働
Garanhus 付近	コーヒーの "	800~1,400	
Santana do Ipanema 付近	酪農々場 "	平均1,000	最近では1,500Cr\$出さぬと人が集 めにくいという
Arapiraca	タバコ葉の仕分場	700~3,000	夜勤して3,000Cr\$になる
Vitoria da Conquista	工場 (一般)	1,700	最低賃金(1日5時間労働,ただし 計算をごまかされること多い由
" 付近	牧場の賃労働	2,000	1日8時間労働
Brasilia 付近	日系農園の日雇	2,600	
São Paulo 付近	三井・井関農機工場	月84 <sup>conto</sup>	
	豊田自動車工場	~140 <sup>conto</sup>	日稼級の最低
	東山農場のコロノ	2,000	最低賃金
		月84 <sup>conto</sup>	

調査は筆者による。1966年施行の最低賃金法によると, São Paulo 84, 75.5, Rio de Janeiro 84, 76.5 PE 66, 54, BA 66, 51, CE・PB AL・SE各州51, PI 48 (単位conto=1,000Cr\$)。(2種あるのは1区と2区の別を示す)。

調査当時はアメリカ1\$=2,200Cr\$であった。故に円に直すにはCr\$を6で割ると大体よかった。

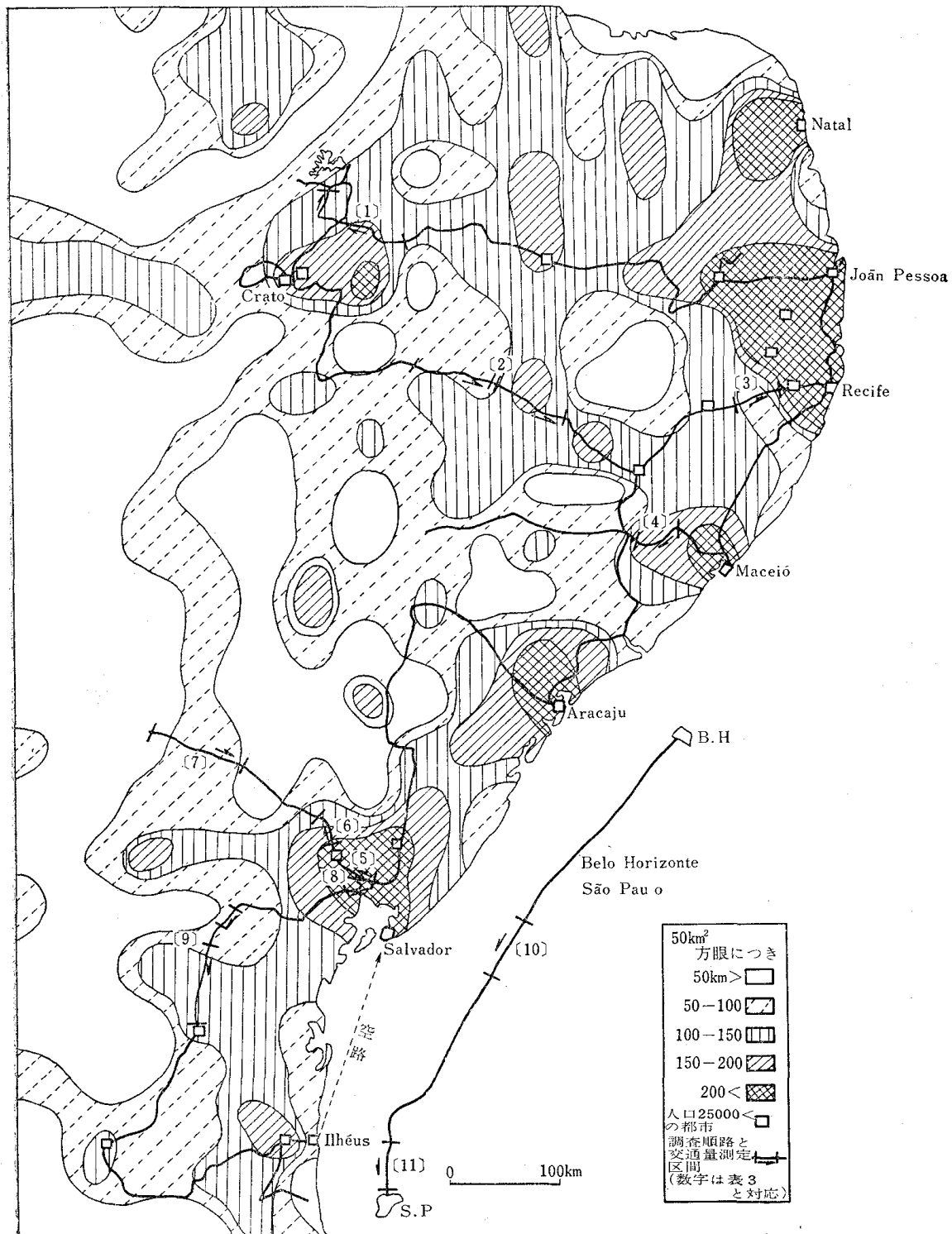


ブラジルは義務教育年限が4年で、世界でも短期年限国であり、国民の文盲率が高いが、中でノルデステは70%くらい、とくにセルトンの村々では90%に近いとさえもいわれている。黒人やインディオの血が濃く残り、それら文化の影響の大きい混血地域として特徴づけられるノルデステが、現在なおかかる形での無気力人口の集団地域として置かれていることが、大地主と労働大衆間における所得の巨大なアンバランスを固定化してきた要因であろう。かくてまさしくノルデステ、なかんずくそのセルトンは「神の置き忘れた地域」なのである。

**後進性の一指標** ノルデステの後進的孤立性は通信交通施設を指標として捉えることもできる。郵便物のおくれ<sup>1)</sup>、ときにはそれよりもおくれる電報、架設数が少なく、しかも故障続出の電話など、通信施設の不備のため調査に支障を生じたことが少なくなかった。時刻表通りに発着しない、新で走る汽車の発車風景をアラカジェでみた。1週に1度だけ運転される線もあるという。軌間や設備の規格は鉄道セクションごとにちがっているため、各セクションは孤立している。中産階級の欠除のためか、村でも町でも自転車<sup>2)</sup>が少なく、とくにオートバイは滅多に見られない。たまに出逢うと、持主はひどく得意であった。この国では町から町へ小型飛行機でとぶ航空機時代が現在の道路時代に先行していた。いまの交通機関はロバと自動車である。殆んど一様な起伏で波うつ高原の上に真直にどこまでも延びて地平線に達する国道（両側に拡幅のゆとりをとってある）、都市周辺ではそれは舗装されている。しかし本道に交わる支道は少なく、また土壤侵食で路面が荒れ、路肩の欠壊が少なくなく、車の動揺がはげしくてカメラを破損したのは筆者だけではなかった。

ノルデステの道路密度図を作成してみると（図2）、海岸地帯と内陸奥地で密度差が大きく、奥地では密度0の地域が広い。都市付近では、一般に密度が比較的高く、ほぼ100km幅の海岸地帯にある大きい都市は、それぞれ交通圏の中核になり、しかも、それら交通圏の大きさは都市の規模に

図2 ノルデステの道路密度



ESSO: MAPA DO CENTRO-NORTE DO BRASIL(1966)により  
自動車に年中通行できる道路について作成

ほぼ対応していることがうかがわれる。

筆者は任意の地点と時刻ではあるが、調査行の車上からすれちがう自動車の数を調査してみた。時速をトラックは40km、乗用車その他は80 kmと仮定し、 $[P] = P \frac{y}{x+y}$ （Pは台数、xは筆者自動車の、yはすれちがう他車の各時速）の式で、調査時間内に調査終了地点を通過したとみなされる台数[P]を求め、これを1時間平均に換算して表示した（表3）。

表 3 交通量調査

区間	測定日	測定時刻	1地点1時間当換算通過台数				
			バス	マイクロバス	乗用車	ジープ	トラック
1	年月日 41.12.16	時分 時分 15.34—19.00	0.6		1.4	0.6	3.0
2	12.20	10.33—13.05	1.2	0.4	4.5	0.4	3.0
3	21	12.35—13.40	2.3	0.8	4.5	3.0	16.5
4	27	11.30—12.30	1.5		2.0	1.5	7.0
5	42. 1. 4	17.40—18.20	6.8	3.8	38.0	5.3	27.5
6	5	9.32—10.10	0.8	0.8	12.7	5.6	12.6
7	//	18.30—19.30			0.5	0.5	7.0
8	6	10.30—11.20	1.8	4.2	18.6	2.4	16.4
9	//	7.10—11.40	0.4	1.0	2.7	1.7	17.8
10	18	12.30—13.30	4.0	1.5	15.0	5.0	11.0
11	//	17.30—18.12	5.0	10.7	37.1	1.5	57.6

区間番号は図2の測定区間を示す

結果は無論正確な比較資料にならないが、傾向としては、当然のことながら、主要輸送機関トラックは乗用車よりも奥地にも延びていること、諸車の量は都市周辺に多く奥地で急減していることがわかる。<sup>3)</sup>トラックが運ぶ物資は砂糖・ワタ・シザル・牛など各産地での出荷がめだつほか、一般的にはコカコーラ、クルーシュ、ミネラル・ウォーターなどの清涼飲料水とそれらの空瓶が多い。リンドイヤという商標の水がサンパウロの工場か

らブラジリアまでも運ばれていた。サルバドル周辺は砂糖・カカオ・石油の各地帯や改良牧野を控えていてトラック輸送量が多いが、サンパウロ周辺に遙かに及ばないことを見ても、ノルデステの経済孤立性がうかがわれるであろう。

ノルデステにおけるような都市人口の急増を含む一般的人口増に対し、人口支持力の大きい工業化への期待の大きいことは後進国や後進地域の共通性である。ところで工業化は単に工業生産の増大という限られた視点からだけ捉えるのではなしに、より広汎に近代的工業社会の形成といった立場で捉えるべきであろう。とするとノルデステを特徴づける農牧社会の現実、これまで見てきたように余りにも前近代的である。セッカはたしかに宿命であろう。しかし、これに対し連邦補助金や旱魃救済資金の投下、貯水池の建設といった施策だけでは抜本的ではないと思われる。抜本的には、ノルデステをして300年来変わるところなくかかるものとして停滞させてきた第一の条件と考えられる大土地所有制にこそ向けらるべきであろう。工業社会の形成と農業社会の近代化とは相互に規定しあいながら進展するのであって、次に述べる総合的な地域開発に志向するスデーネの役割が高く評価されるゆえんである。

- 1) 昭和41.12.11レシーフェで東京の拙宅あて出した絵葉書が43.5.23についた。頼んだホテルで出し後れたらしく、スタンプは1968.5.16であった。後に驚くよりもむしろ後れても出してくれた誠意を感じた。
- 2) 破損したカメラはノルデステでは修理するところがなかった。サンパウロでしか直せぬという。筆者はサンパウロの日本ヤシカのサービスセンターで直した。
- 3) 奥地ながらアラリーペ台地の影響でカリリイ地方は雨量が多くセルトンのオワシスといわれる。その中心地クラトーの市役所に登録された車数は乗用車29, ジープ35, トラック58台(1950年)であった。
- 4) 1960~66年の人口増加率は、レシーフェ26%, サルバドル28%, フォルタレーザ44%, ノルデステ10州の首都は平均32%, またスデーネ管区全体では15%。

## 2. スデーネの役割

クビチェック政権下の1959年に、ノルデステの開発を全面的に推進、統轄する機関として、SUPERINTENDÊNCIA DO DESENVOLVIMENTO DO NORDESTE (SUDENE、東北開発庁)の設置が決定、1962年以後、連邦予算からの支出を主とする国内資金と、おもに「進歩のための同盟」によるアメリカの借款および供与を中心に、西欧諸国の協力も得て、スデーネは地域開発を意欲的に進めている。1965年までの第1・2次計画で約2,200億<sup>5)</sup>Cr\$のスデーネの資金を呼び水として実施された主要な活動実績は次の通りである。

(1) 約63,000人の学童を新たに就学させ、約10万人の学生のため教授・学習の条件を改善した。また州および連邦機関の職業水準を高め、2700名以上の技術者の研修を行った。(2) 私企業に対する税制上の優遇措置と信用上の便宜供与のため264の企業のプロゼクトを承認した。これらは直接間接に約10万人の労働市場を開拓した。なお60～67年6月までをとると、承認した企業プロゼクトは413、うち92は操業開始、91は建設中、50は計画中、180は老朽設備で知られる綿工業を中心とした既存企業の近代化である。その分布はペルナンプコ(131)、バイア(85)、セアラ(67)、パラíba(53)の各州に集中している。なお操業開始の工業は、繊維・食品・化学・鉄鋼・非金属等に集中している。(3) ノルデステを孤立から開放する基礎的条件としての道路網の改良につとめ、365マイルの道路を舗装し、1,200マイル以上の道路が新設された。また、電力の開発を進めて供給区域を拡大し、64年末には1人当り年間電力消費量を59年の40kwから75kwに引上げた。(4) 乾燥地域に556の掘抜井戸を掘り、また農民の協力によって36,000エーカーに選別したワタと16,500エーカーに飼料作物が栽培され、果物、豚などの品種改良につとめた。(5) 都市、農村の保健・福祉の基本的条件でありながらひどく遅れている上下水道の改善を行ない、約200万

人の生活改善に寄与した。(6) 水産資源・地下資源・ジャガリーベ溪谷などの水源地帯などの調査に着手した。(7) かくて1965年におけるノルデステの所得の年間成長率は、国の平均6%を上廻る7%に達した。

目下スデーネは第3次計画(1966~68年)を推進中である。3年間の投資需要は38,640億Cr\$と見積られ、うち50%は公共部門、36%は民間部門、14%は海外からの出資となっている。そしてスデーネは投資総額の19%を使用せねばならない。その配分は下部機構(電力・道路・基礎的衛生設備)に49.7%,労働者訓練などの人的資源に13.4%,農業および市場に12.9%,天然資源に7.4%,工業(奨励と研究)に5.5%,特別計画に5.8%,一般管理に5.3%である。第1・2次計画に比して農業・市場・労働力・工業の開発によりウェートをかけている。

**所得税控除** 企業のノルデステへの進出意欲を高める方法として、ブラジルの法律に基づきスデーネが調整する優遇措置が特筆される。

ブラジルで所得税を納付している企業は、所得税および同付加税の50%をノルデステにおける工業・農業・電気通信(サービス産業を除く)の各プロジェクトに投資する目的をもって、ノルデステ銀行(BNB)に予託することができる。この予託された減税資金を第34/18条資金(スデーネの第1・2次指導計画法第34条・18条によって設定、更新した)という。3カ年後の年末までにノルデステでの自己の開発計画または第三者のプロジェクトにこの資金の適用ができなかった場合は没収されて連邦政府へ帰属することになる。

**進出企業への融資** BNBはスデーネの承認した企業プロジェクトの全投資額の50%までを融資できる。またスデーネは全投資額の25~75%までを第34/18条資金から投資するが、この場合%の決定は企業の優先度による。その条件は工場位置、地域の原材料使用、地域の雇用拡大、輸入代替輸出の可能性などによって決定される。自己資金は最低25%で、うち12.5%は第三者を募り、または地域の開発公社に肩代りさせることもできる。つま

り、僅か1/8の自己資金で企業進出ができるわけである。なお、外国企業も、所得税予託を行なっているブラジルにおける商社と連絡し、スデーネの調整をうければ、国内企業と同等の恩恵がうけられる。

その他、一定期間所得税の免除ないし半減とか、機械・同部品の輸入関税免除などの優遇措置も講ぜられている。また、各州も一定期間の州税免除や開発公社による融資などで企業の誘致をはかっている。

**スデーネ企画の波及効果** スデーネの業績は、国内および海外からの投資によって遂行された成果につき、単に数字に表われた結果だけで評価されるものではない。スデーネの活動によって短期間にノルデステをブラジルの他の地域や世界と結びつけた接触を通じ、また開発に対する大土地所有者の反感的風土の中から、徐じょに生起してきた企業者精神や増加してきた技術者集団間の相互緊密化などを通じ、開発に方向づけられた体制への歩みをノルデステが踏み出してきたことが、より重要である。しかし工業社会への道はまだ極めて遠い。一般にラテン・アメリカでは、これまでのところ、大衆の広範囲にわたる消費活動への参加が工業化を支えるといった事実がなかった。ノルデステはその典型的地域に外ならない。ここでは工業製品の市場は少数の特定階層によってだけ成立しており、他の大多数の、なかんずく老大な農村人口は、最少限度の衣類その他二、三の必需品を除き、工業製品の消費には全然といってよいほど参加していない。人口増加率に対応した形で所得の増加率が高まらない限り、このような構造的貧窮化から解放されないのである。ここからまず農業改革が必須条件として登場してくる。ところでスデーネは、農業部門に対する投資に重点を置きながらも、農業改革を一方的に工業化への先行条件としてだけ捉えるのではなく、むしろこれらを総関連的に、広汎な社会的、経済的変容の中で位置づけて計画的に捉えようとしており、かくて工業社会建設への社会の一般的願望と、因習的社会構造の動きの間にある抜きさしならないズレをしだいに縮少しつつあるものと考えられる。

5) 1962年—60億, 63—71億, 64—379億, 65—1724億, 1966—2500億Cr\$

### 3. サルドバルの工業

ブラジルは19世紀の中ごろまでは、ノルデステの糖業以外には重要な工業をもたなかった。1889年共和制宣言以後、国内資源の多角的利用が計画的な施策で発展しはじめたが、この段階における工業は綿布工業と食品工業を中心とした消費財生産で、工場の大部分はレシーフェ・サルバドルを中心としたノルデステの海岸地帯に依然集中していた。その後、南部でコーヒー栽培を中心にした農業開発が進展し、交通・電力などの産業基盤も整ってきたので、ブラジル経済の中心はしだいに南遷し、第一次世界大戦を契機にサンパウロがその中枢になってきた。そして、ノルデステはこの過程で、相対的に工業化のおくれた地域として刻印づけられるようになり今日に至っている。

ノルデステの今回の調査巡検で直接諮問しあるいは車上から観察した工場46のうち、砂糖工場とこれについて多い綿紡・綿布工場とを合せると40%をしめていて、ノルデステの伝統性が知られた。外に、サトウキビを原料としてアルコール・ゴムなど、バガスからの紙、また綿実油など化学工業もおこってきている。なおタバコ・アガーベ・カカオの各産地ではそれらの精製加工が行なわれ、カカオなどの植物油から石けん製造も行なわれている。酪製品工場や皮革工場もあり、家具・陶器・セメント工場もみられて多様であるが、いずれも原料指向性の消費財生産であって、立地は都市を中心にしながらも無論分散している。分散立地の典型は瓦・煉瓦工場、集落立地とかたく結びつき、人口規模に対応した設備規模でその場末か近郊に立地している。近代工業がやや集中して工業地域景観をみせているのは、レシーフェ近郊からカボに至る間で、サンブラ社（パナマ系）の綿・綿実油、ウィリーオーバーランド社（米系）の自動車、その他米系のゴム工場やビール、アルコール工場などが立地している。



## ノルデステ（東北ブラジル）工業化の問題点

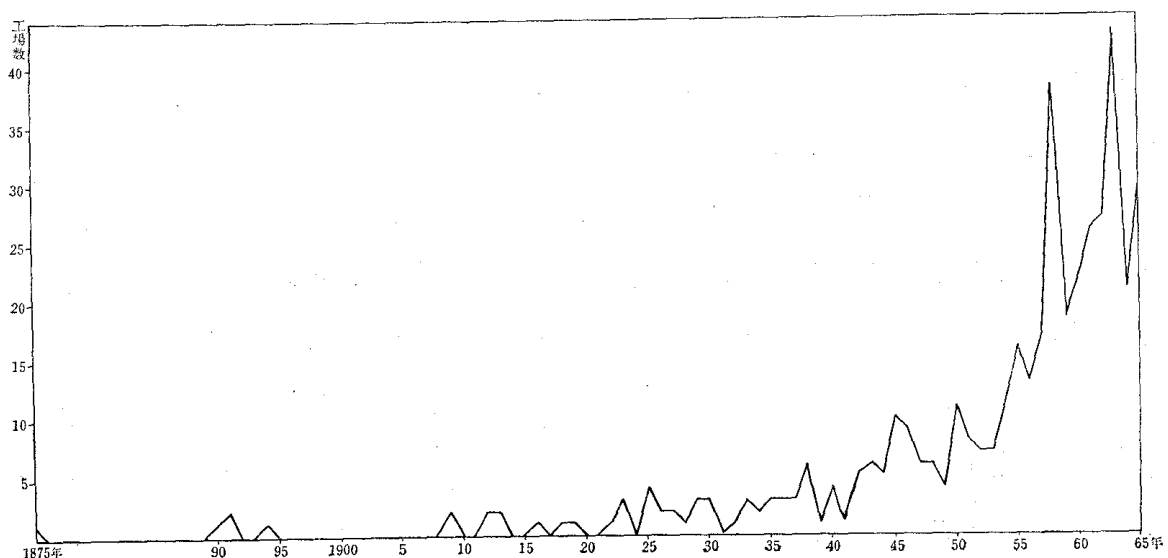
都市工業化のひとつの場合として、サルバドルを例にとってみた。

サルバドルは1763年までブラジルの首都であり、ノルデステ糖業の中心として当時黒人奴隷の輸入港として賑わい、いまでもプレトー（Prêto）やムラット（Mulato）など、黒人系の混血がひじょうに多い。現在、バイアの州都としてバイア大学もあり、ブラジルの主要港市の一で人口84万（1966）、レシーフェと並ぶノルデステの中心都市である。そして、この2都市は、スデーネの奨励を契機として工業化の基調を高めている拠点都市である。

筆者は IBGE（地理統計局）のサルバドル支所で、同市域の1965年現在における工場の個票を整理する機会を得た。以下、その結果について述べよう。

当時サルバドルの工場数は457を数えた。そのうち創業年の明記された430工場について創業年を調べると図3のようである。この図からは、適確に工場数の累年推移を捉えることは無論できないが、だいたいの傾向は示されるであろう。すなわち第一次大戦前後に創業した工場から現存しは

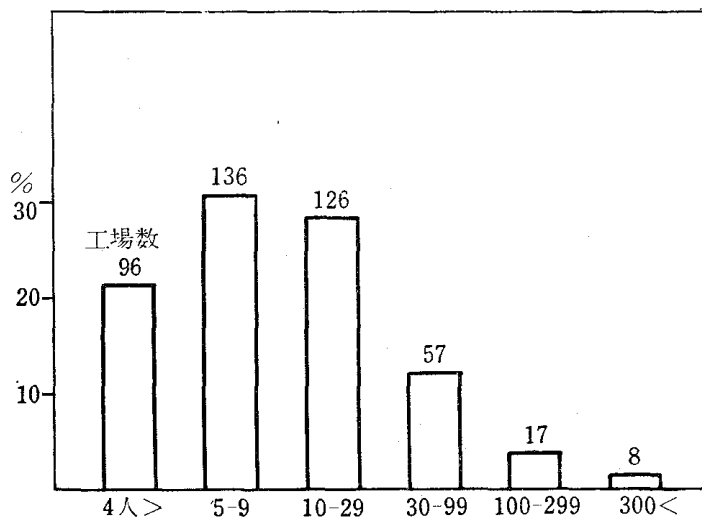
図3 サルバドルの創業年別工場数



IBGE: 1965年調査個票より作成

じめ、およそ5～6年くらいの周期で消長しながらも、しだいに工場数が増加している。第二次世界大戦前後から増加傾向がつよくなり、とくに近年の伸びが目立っている。(ただし最近はインフレ抑圧のための諸政策の遂行で景気は後退している)。サルバドルにおける工場推移のかかる傾向は後述のサンパウロ州のそれとほぼ類似しており、ともにラテン・アメリカ随一のブラジル工業化の国民経済的動向を反映している。

図 4 サルバドルの規模別工場数



IBGE:1965年調査個票より作成

工場規模別を 437 工場についてみると (図 4), 5～9 人の規模が最多で 31%をしめ, 10～29人規模が29%でこれにつぎ, これら小工場で60%をしめている。さらに零細な 4 人以下工場の22%を加えると, 30人未満工場としては 82%に達し, 100 人以上工場が 5%にすぎず, 本市工業が零細小規模

性で特徴づけられることが知られる。工場従業者総数は約 2 万人 (不明の小工場 4 を除き 19,750 人) で 1 工場平均は約 29 人である。

業種別分布を, 任意に選び出した 235 工場 (30 人以上の全工場 82 と, 29 人以下 153 工場) についてみると表 4 のごとくである。食品工場が圧倒的に多く, 30 人以上工場では工場数の 24%, 従業者数の 25%, 生産額の 38% をしめている。生産額の比率がとくに大きいのは, 製粉・バター・タバコなどで, 比率の大きいのは相対的価格高が影響していると思われる。パン・ビスケットなどの製造が食品工業中で最も多く, とくに 9 人以下の規模に集中していて, 食品工業を総体として小規模なものにしている。100～

表 4 サルバドル工業の業種

	工 場 数					うち30人以上工場につき				
	9人>	10~29	30~99	100<	計	工場数	従業者数	生産額 (10 <sup>7</sup> Cr\$)		
食品	51	15	13	7	86	20 24%	2406 25%	3878	38%	
繊維	5	7	1	6	19	7 9	2122 22	981	10	
木工	11	4	7	1	23	8 10	427 4	290	3	
印刷	8	9	4	1	22	5 6	465 5	219	2	
紙器	3	3	2		8	2 2	128 1	87	1	
皮革	1		3	2	6	5 6	661 7	394	4	
化学	4	5	9	6	24	15 18	1827 19	3677	36	
土石	3	9	8		20	8 10	475 5	210	2	
金属	6	6	7	2	21	9 11	809 8	418	4	
機械	2	1	3		6	3 4	256 3	53	1	
計	94	59	57	25	235	82 100	9576 100	10207	100	

IBGE: 1965年調査個票より作成

299人工場では、小麦製粉1、カカオバター1、清涼飲料水3、また300人以上工場では、清涼飲料水1、タバコ製造1で、コカコーラやファントのような清涼飲料水工場が多く、熱帯の工業生産らしい特徴がでている。市中に砂糖工場のないのは、それがプランテーションの生産で、サトウキビ耕地と結合しているからである。

繊維工業では、小さい工場は殆んど縫製工場である。100~299人工場では、シザル麻1、麻織物1、衣料1、綿紡1、また300人以上では、綿紡・綿織物1、綿織物1工場があり、とくにこの綿織物工場は従業者884人で本市における最大の工場であり、安物生産で知られている。したがって30人以上工場についてみると、従業者率では食品工業について第2位をしめる。しかし生産額の比率はそれと対応せず低くなっている。原綿の生産地域でありながらこのような低生産性を示すのは、設備の老朽化が一般的に大きい要因であり、また1965年上半期に業界に危機が襲い操業停止の措

置が多数の工場とられたからである。

木材、紙および紙器、印刷の各工業は一般に小規模で、100～299人工場では、家具1、新聞印刷1があるだけである。30人以上工場中にしめる比率もともにほぼ数%にすぎない。木材工業では家具工場の方が製材工場より規模の大きいものが多く、1工場当り平均従業者数は、家具は30人で製材はその半ばである。紙器生産では紙袋や紙箱がおもで、4人以下規模の零細な工場はむしろ少ない。皮革工業は、なめし皮加工も製靴も規模がやや大きく殆んど30人以上工場で、なめし皮工場では従業者376人、製靴では167人の工場がある。土石工業には100人以上工場はないが、4人以下の零細工場も少なく、やや中規模に集中している。舗装用石・大理石加工・ガラス瓶・セメント土管・石膏装飾品などの工場がある。皮革・土石工業の全工業においてしめる地位もそれぞれ10%以下で高くはない。

化学工業は食品・繊維工業と並んで本市工業の主要部門をなしている。30人以上工場についていえば、工場数・従業者数がともに約20%をしめ、生産額では36%をしめて、食品工業と伯仲している。100～299人工場4、300人以上工場2あって、平均規模が大きく生産性が高い。大きい工場は殆んどココア・ヒマの油脂工業で、それを原料にして加工する石けん、ろ一そく工場は一般に小規模である。これらに次いで中規模の飼料工場が多く、また、肥料や薬品工業もあるが小規模である。外に、圧縮酸素などの生産もみられ、近代化の歩調がうかがわれる。金属工業は、ここではすべて金属製品の生産であって、中規模の鉄バネ（クッション用など）や鉄製家具の工場が多く、これらで半分をしめる。針金・ブリキ缶および樋などの工場も中規模である。100人以上工場としては、排水管と各種タンク製造の2工場があり、後者は従業者数が358人である。

機械工業の不振が大きく指摘される。工場数が少なく100人以上工場もなく、30人以上工場の生産額の全工業生産額にしめる割合は僅か1%にすぎない。中規模の造船・工作機・肉乾燥器や車輛工場がある外、時計や

テレビなどの小修理工場もある。しかし前にものべたようにカメラを修理するところがない程技術のおくれが目立っている。

サルバドルは、久しくノルデステの中心都市として栄え、最近スデーネの工業化政策が滲透しつつあるが、なお工業は伝統的に消費財生産に偏っていて、工業構造高度化の基調はおくれている。さきにも述べたように、貧富の差が大きく、おびただしい大衆が飢餓線上におかれている地域で、広汎に工業製品への市場が形成され得ないことが決定的な要因である。サルバドルにしてなお工業化はかかる現状である。ノルデステ工業化の道の遠いことがこれで察せられるであろう。

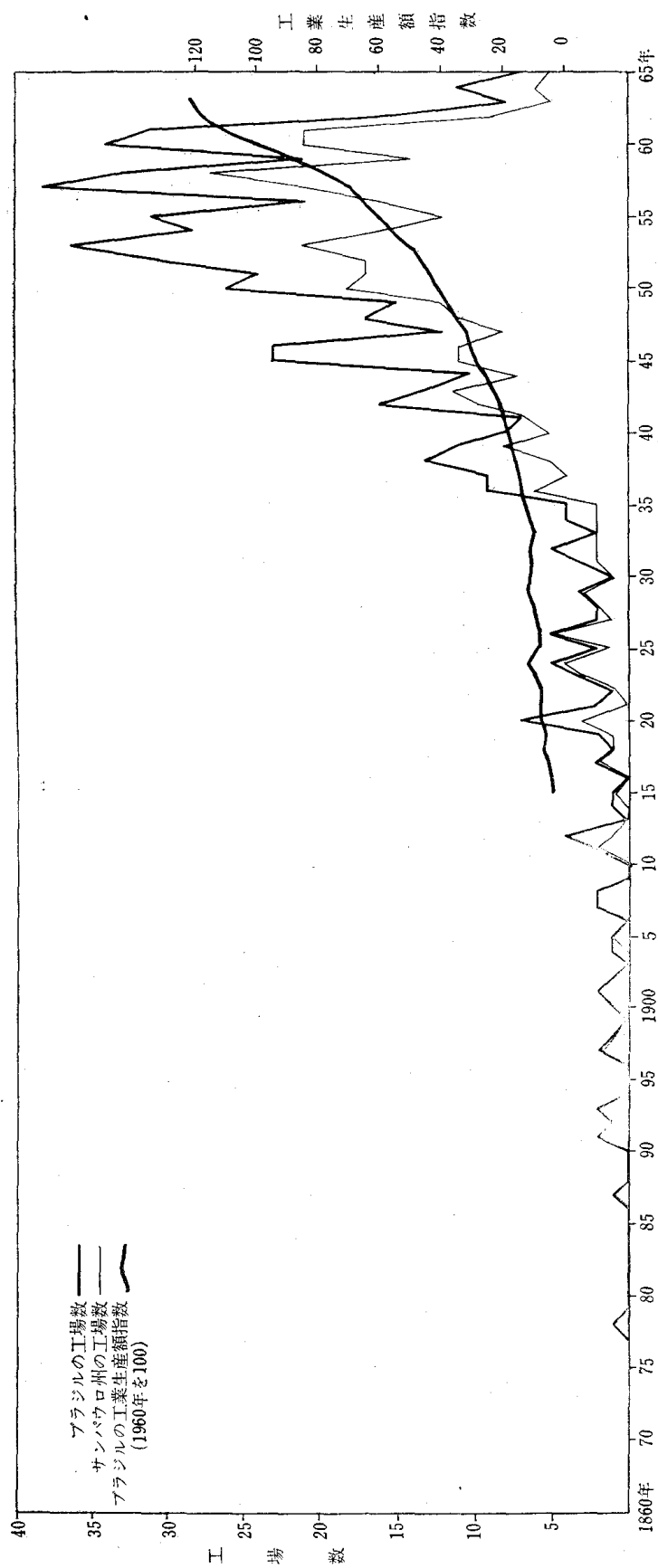
#### 4. 日本企業の進出

ブラジルの工業化は、国としては近年急速で（図5）、その速度の大きさはラテン・アメリカの中では随一で、現在工業雇用数や生産額はアルゼンチンやメキシコを遙かに超えている。かつて南米のABCのうち、第二位に位置づけられたブラジルが、いまではラテン・アメリカのBAMの首位におかれるようになってきた大きい理由である。しかし工業化の展開は地域的に著しく限定されていて、工業立地の偏在が目立っている。

近代工業の基幹としての機械工業を例としてBANAS（1966）の企業リストを整理してみると、その分布は殆んどベロ・オリゾンテからポルト・アレグレに至る南部に限定され、中でサンパウロ市を中核とする同州がもっとも卓越し、これにリオ・デ・ジャネイロ市を加えると、工場数の90%以上をしめる独占体制である。ノルデステではレシーフェとサルバドルが僅かに関与するに止まっている（図6）。

サンパウロ州における機械工業の展開は、工場創業年からみて、そう早くはなく、むしろリオなどよりは若干遅れている。しかし第二次世界大戦後の躍進が大きく、国の工業化のテンポと歩調を合せて今日に至り、相対的には圧倒的な大きさに達したのである。ブラジルの工業化は政府の保護

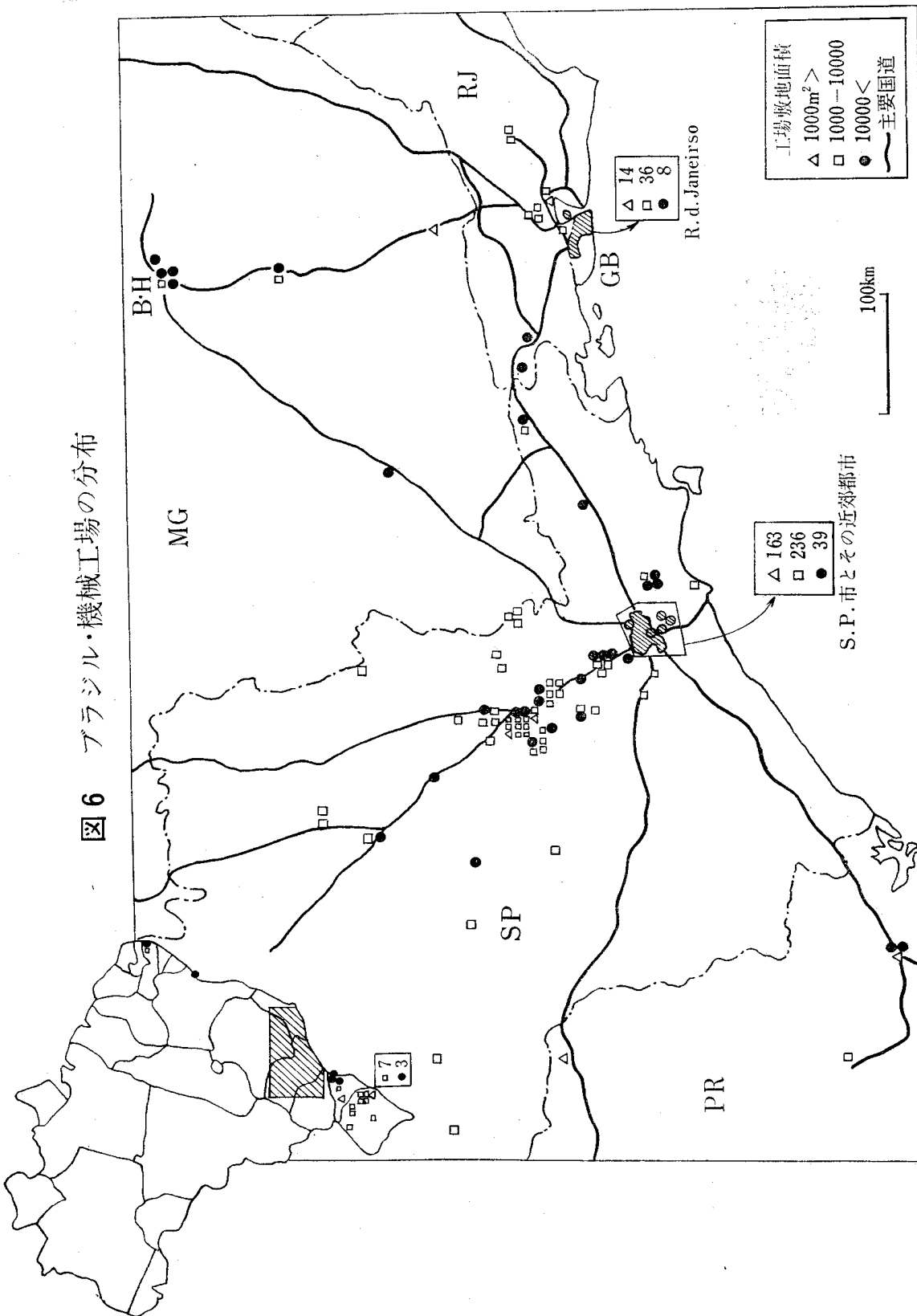
図5 ブラジル・機械工業の創業年別工場数



ブラジルおよびサンパウロ州の工業創業年は Banas ; Máquinas e ferramentas 1966 より,

ブラジルの工業生産額指数はラテン・アメリカ協会 ; ラテン・アメリカの工業化 (Ⅱ) 関係統計資料より作成。

図6 ブラジル・機械工場の分布



Banas ; Máquinas e Ferramentas 1966より作成

表 5 サンパウロ州中心の日本進出工場

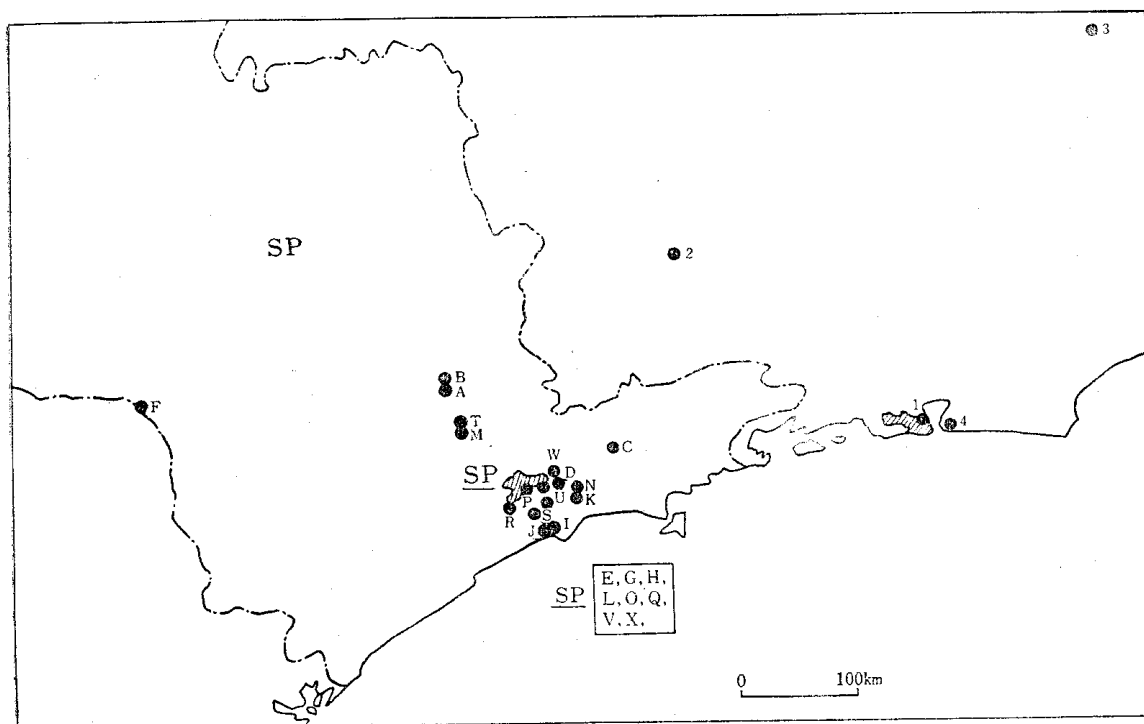
地図 番号	企 業 名	所 在 地	登 録 年	資 本 金 (100万Cr\$)	従業者数	生 産 品 名
A	東洋ブラジル	Americana	1955	1,777	595	綿糸布
B	日紡ブラジル(有)	"	58	900	230	綿糸
C	鐘紡ブラジル	São Jose dos Campos	56	1,955	470	"
D	都築紡績(有)	Suzano	59	792	450	"
E	三洋毛織ブラジル(有)	São paulo	57	133.6	86	毛織物
F	ブラジル農工	Ourinhos	56	300	80	落花生油・大豆油
G	ブラジル長岡商工(有)	São paulo	56	115	50	ハツカ脳・全油
H	ブラジル味の素商工	"	56	23.6	28	味の素再包装
I	ブラジル大洋漁業(有)	Santos	59	347.6	258	漁業
J	大洋水産工業	"	58	295.4	50	製氷・水産加工
K	ブラジル特殊陶業	Mogi das Cruzes	59	1,025	300	自動車プラグ
L	三井イハラ化学	São paulo	65	180	15	農薬
M	ブラジル・ヤンマー・デーゼル・モーターズ	Indaiautuba	57	3,325	227	ディーゼル・エンジン
N	ブラジル豊和工業	Mogi das Cruzes	56	2,300	700	織機
O	伯国精機	São paulo	56	415.6	100	ミシン部品 自動車部品
P	ジャチャック電気機械商工	Santo André	55	9.4	100	オルゴール 電飾工事



Q	海外機械興発サンパウロ	São paulo	56	144	36	精密ネジ
R	ブラジル久保田鉄工（有）	Diadema	57	1,086	160	耕耘機
S	ブラジル豊田自動車	São Bernardino Campo	58	4,394.8	500	ランドクローザー
T	三井・井関農機	Indaiaatuba	62	1,440.8	85	耕耘機
U	サドキン電球工業	Arujá	57	255	180	電球
V	伯国田村電機（有）	São paulo	58	300	110	トランジスタラジオ・テレビ
W	パイロット万年筆伯国	São Miguel paulista	54	396.1	280	万年筆・インキ・ボールペン
1	石川島ブラジル造船	Rio de Janeiro	59	17,259	1,914	造船・ディーゼル発動機
2	伯国三菱重工	Varginha (MG)	63	495.6	600	ボイラー・石油化学装置（ドイツのドイツセンの工場を買収）
3	ミナスゼライス製鉄所（ウジミナス）	Ipatinga (MG)	56	150,000 （日本ウジミナス社21.46%出資）	8,500	製鉄
4	新潟ブラス（新潟鉄工子会社）	Niteroi 附近 (RJ) のアルカンタラ	57	73.3 （現地の山形建設と折半）	90	船舶その他一般機械修理、ディーゼル・エンジン部品

外に、北伯漁業、伯国日本冷蔵（PE）、倉敷ブラジル（RS）、高砂香料、南拓貿易（PA）——RSはリオ・グランド・ド・スール、PAはパーラ、RJはリオ・デ・ジャネーロ州。1964年現在ブラジル大資本100社中ウジミナスは31位、石川島は71位。最近大手紡績各社（東洋紡・倉紡など）は、関税障壁などに妨げられて綿製品の輸出がしいに困難になってきたため海外投資の一環として現地での設備投資増強にのり出している。表中有限以外は株式会社。（1965年現在、サンパウロ日本総領事館資料および Banas, 1966 より作成）

図 7 サンパウロ中心の日本進出工場の分布



サンパウロ日本総領事館 1965年調査資料より作成

政策，すなわち課税・為替などの特典や長期融資などによる促進策と，交通網や電力網などの整備拡充といった産業基盤の強化によることはいうまでもないが，アメリカを中心とする外国企業の進出の波及効果の大きいこともあげられよう。とくに図 6 に示したようなサンパウロの機械工業の集中は，外資系自動車企業の殆んどが，サンパウロ市とその近郊に立地して国産化をおし進め，また，鉄鋼業その他の関連工業をさかんにし，下請企業を育成してきていることに負う面が大きいのである。

1950年代を中心に進出した日本の企業も工業・商業・金融業とも殆んどサンパウロ市とその周辺に集中している（表 5，図 7）。このような情勢を背景にしてノルデステへの日本企業の進出についての実情はどのようなだろうか。

昭和42年 1 月 26 日夜，サンパウロの日本文化協会でノルデステの開発に

つき所見を述べたが、降壇を待ちかまえていたようにサドキン社長山本勝三氏が話しかけてきた。「レシーフェへ進出して特殊電球を生産したい。進出計画は認可直前であるが果して見込があるだろうか」と。50%の減税資金の投資や豊富低廉な労働力の存在は魅力にちがいないが、劣悪な文盲<sup>6)</sup>的労働力と市場性欠除といった条件を十分に考慮に入れるべきであろうと話し合った。

レシーフェには日冷などの漁業進出がすでにみられ、チェリー無線（コンデンサー生産）の進出が認可され、サドキン電球は認可直前だが、ヤンマー・ディーゼル<sup>6)</sup>の進出はまだ認可されていない。ヤンマーの小型発動機はノルデステの農業開発向けに需要がおこっている。トヨタは外国自動車企業との競合をさけ、規模を縮小して奥地向けのジープ生産に主力を集中している。筆者の訪問した日にレシーフェの市長が同工場を来訪、ジープ2台を注文したと植松工場次長が語っていた。サルバドル郊外でトヨタの立看板もみた。日立のタービン3台がパウロ・アフォンソ発電所に据付けられていて堅牢でよいと好評であった。この訓練所に教材用としてトヨタがジープの模型を寄付してあった。サルバドル近郊の原油工場には日本製のパイプがあった。クラトーの近郊でサンパウロの日系池森製作所の社員が製紙機の取付けを行なっているのをみた。またクラトーのホテルで関西電力の社員数名と逢った。——このような断片を拾い、トヨタ、三井・井関、ヤンマー・ディーゼルなどの工場を見学し、またサンパウロの日系人町ガルボン・ブエノでの日系人との対話、レシーフェやサンパウロの総領事らとの対談などからみて、日系企業にはノルデステ進出意欲があるが、いずれも市場のスケールをはかりかねて足踏みしているといった現状が判断された。京野サンパウロ州議員などは、ノルデステ・セルトンへの牧場進出に食指を動かしていると語った。

ノルデステは、スデーネの施策やアメリカ企業などの進出が見られるとはいえ、なお工業化への道は遠く、かくてこの国は開発途上国に通有な工

業の相対的な局地過密と広域過疎とのアンバランスをなお長く続けることであろう。

- 6) パウロ・アフォンソ発電所では採用者について、よみ書きの訓練が5カ月間必須であり、ついで電気についての直観教材による教育に力を注ぐ必要から、従業員の研修所は重要な地位をしめている。

### 参考文献

- ブラジル日本商業会議所 (1967) ; ブラジル経済事典  
レシーフェ日本総領事館 (1966) ; 東北伯地域経済開発の現状と優遇措置  
サンパウロ人文科学研究会 (1956) ; ノルデステの風土と社会  
(ブラジル研究叢書第3集)  
BANAS S. A. (1965~66) ; Anuário Banas  
Sudene (1966) ; Incentives to industry and agriculture in northeast Brazil  
Sudene (1966) ; A Grand Oportunidade : Industrialização  
Mario Lacerda de Melo (1956) ; Northeast (Excursion Guidbook  
No. 7—Eighteenth International Geographical Congress)  
Preston E. James (1959) ; Latin America